

II. 主 題

1 腹腔鏡補助下直腸手術症例の検討

野上 仁・山崎 俊幸・狩俣 弘幸
横山 直行・桑原 史郎・大谷 哲也
片柳 憲雄・斎藤 英樹

新潟市民病院外科

【対象】2002年4月から2007年9月に手術を施行された87例。

【結果】平均手術時間212.2分、平均出血量113.4ml。鏡視下手術完遂例で再建を要する75例について直腸切離法を検討。体内法71例、翻転法4例。体内法のうち、小開腹層から開腹手術用の縫合器を8例に使用。低位前方切除術症例で縫合器1個のみを使用した10例を検討。縫合器のアプローチは12mmポート1例、小開腹層6例、翻転法3例。12mmポートからのアプローチが困難な症例には小開腹創からのアプローチや翻転法が有効であった。術後合併症を14例に認め、創感染4例(4.6%)縫合不全1例(1.2%)。

【結語】腹腔鏡補助下直腸手術の短期成績は良好であった。適切な直腸切離法は確立されておらず、更なる工夫が必要である。

2 直腸癌括約筋温存術後の再建法別排便機能の経時的変化

小林 康雄・八木 実*・飯合 恒夫
谷 達夫・丸山 聡・岩谷 昭
須田 和敬・島田 能史・高橋 聡
畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科
久留米大学外科学小児外科部門*

【目的】直腸癌術後の排便機能の経時的状態変化を評価検討する。

【対象, 方法】再建方法別に、Ra直腸癌に対する低位前方切除術(LAR)施行例(Ra-LAR)(7例)(A群)、Rb直腸癌LAR施行例(Rb-LAR)(9例)(B群)、超低位前方切除術(SLAR) J pouch再建例(9例)(C群)、SLAR-Coloplasty pouch再建例(10例)(D群)に大別した。これらに臨床

スコア(Kellyスコア:KCS)、直腸肛門内圧検査に加えFecoflowmetryを実施し各因子の経時的変化を比較検討した。

【結果】1)経時的に有意に改善を示した因子は、A群のTR及びFmax、B群のRP、C群のAP及びTRであった。2)C群ではRP及びERが逆に経時的に低下する傾向を認めた。

【結語】直腸癌術後客観的排便機能評価は再建法に拘らず概ね、術後経過年数に伴い改善されるものと考えられた。

3 当科における潰瘍性大腸炎に対するW型回腸囊肛門吻合術の経験

桑原 明史・須田 武保・坂田 純
金子 和弘・飯合 恒夫*・畠山 勝義*

日本歯科大医科病院外科

新潟大学大学院消化器・一般外科*

潰瘍性大腸炎自験例7症例は、手術の絶対的適応2例、相対的適応5例であった。J型回腸囊で3期手術の1例以外、W型回腸囊肛門吻合を施行した。そのうち、3例に一時的人工肛門を置かない一期的手術予定し、最終的に2例に施行した。2期分割手術は4例であった。術後の合併症、入院経過、退院後の排便機能(排便回数、漏れ)に関し、一時的人工肛門造設の有無で差を認めなかった。近年、本邦・欧米から症例を選択することで回腸囊肛門吻合時の一時的人工肛門造設の有無で感染症や回腸囊関連合併症の頻度に差がないと報告されている。当科の経験からも、低侵襲な一時的人工肛門を置かない回腸囊肛門吻合術は選択肢の1つと考えられた。

4 大腸全摘、回腸囊肛門吻合術の長期成績と問題点

飯合 恒夫・谷 達夫・丸山 聡
岩谷 昭・須田 和敬・島田 能史
高橋 聡・畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科学分野

【目的】当科では、1985年以来UCとFAPに対